

武内先生の質問への回答として

馬居政幸 2020. 9. 6

1) 西本さんの発表と馬居さんの発表の繋がりに少し無理があるとも思いました。

学力が中学で上昇するところは、静岡以外にも、いくつかあるはず。静岡だけを取り上げる理由の説明が欲しいと思いました。

- ・四類型は理論軸ではなく小学校と中学校の正答率の都道府県別順位の傾向で四種に分けたものです。
- ・小学校が低くて中学校が高い類型としての静岡に焦点を絞ったのは馬居の要請です。
- ・小学校の低さが静岡県知事から問題視され、文科省との関係も含めて話題になりました。
- ・そのため、あくまで私見としてですが、小低中高こそ理想との観点から、静岡の先生方の授業の質の高さをメモにして、旧知の静岡市と静岡県の教育委員会関係者にレポートしました。
- ・私の仮説の確証を得るために、馬居研究室の卒業生による授業研究ネットワークを活用しました。
- ・この時に整理した静岡市内公立小学校の教員と授業の特性が、今回の授業モデル形成の基礎作業になりました。
- ・それから本報告で沖縄、秋田、静岡の比較を選んだのは、日本子ども社会学会ラウンドテーブルでの継続的な報告をするために形成した研究グループのメンバーによる継続調査が可能だからです。
- ・他方で、経済格差の指標として用いられる世帯年収平均では、学力調査の都道府県別正答率順位を説明できないことを実証するデータの収集対象として、秋田と静岡の対比に説得力がある、という判断が私の中にあったことも事実です。
- ・より単純には、静岡、秋田、沖縄の3県には、日常的な参与観察が可能な学校関係者がいることです。
- ・同様に、1番秋田、ビリ沖縄、通説と異なる「小低・中高」の静岡の特性こそ理想であり、経済的要因とは異なる学校と教員の教育力を問う上で静岡は合理的と判断したことが、静岡への拘りの原点です。

2) 馬居さんの、小学校の授業モデルは、静岡県の小学校の授業を多く観察した結果から出てきたものだと思いますが、これは、静岡特有のものなのか。日本全国共通のものなのか。外国ではどうなのか。また、これは理念型なのか。平均型なのか。などの説明がもう少しほしかった。

- ・私の記述の前提(目標)はM. ヴェーバーの「理念型 Idealtypus」です。
- ・したがって、全国のすべての授業の典型や平均ではありません。
- ・全国の多数派の小学校の教員が実現したいと願う授業形態と私が判断したものです。
- ・その意味で、静岡県だけでなく、PPTでは紹介しましたが、秋田、山形、福岡、宮崎、沖縄は、共同研究者のフィールドです。(この点を記載していないのは私のミスです。)
- ・さらに、以前、武内先生にお送りした本発表テーマのための準備メモは、共同研究者だけでなく、全国の実践者と研究者と教育行政担当者に送って評価してもらっています。
- ・特に、子ども社会学会ラウンドテーブルにおいて、秋田の授業の特徴(学力調査1位の背景と理由)を紹介していただいた秋田大学の濱田先生からは、実践者の目から表現してくれたと、感謝されました。
- ・さらに、学習指導要領の変遷をたどれば、授業モデルの理想であることが理解されます。
- ・ただし、古典的には勝田先生の系統主義と梅根先生の問題解決学習の論争にあるように、私の授業モデルを批判する授業観にたつ研究者もおられます。
- ・なお、授業づくりの構造の分析のために使用した概念は全て社会学の基本用語を用いたつもりですが・・・。(枠組みは、マンハイムとバーガーの研究で培ったセンスと思考と考えていますが・・・)

3) この方式が、子ども達の学ぶ力を付けるという解釈ですが、それを実証するデータはどれなのでしょうか。(中学生の学力得点が高いということが、これの実証なののでしょうか?)

- ・この説明を口頭発表でも PPT シートにも明記していないことは、私のミスです。
- ・一番の原因は、事前に行った ZOOM 研究会で、時間の制約と授業モデルの説明の難しさを痛感し、中学校の授業モデルをカットしたことです。
- ・また、西本先生の問題提起に対する応答よりも、オンラインとリアルとの対比に発表内容を焦点づけたことの結果です。
- ・それでも、私的には小学校の授業モデルの中に組み込んだつもりですが、多分、読み取れないと思います。この点でも私のミスです。

4) 格差の議論は、少し複雑で、そこまで、ここで論じる必要があるのかと思いました。

- ・この点はその通りですが・・・
- ・実は、本研究の目的との関係では、格差の再定位が研究テーマの中心でしたので・・・
- ・作業を進めるうちにオンラインとリアルの比較が主流になってしまいました。
- ・しかし、学力格差と経済格差を自明のこととする傾向に異議申し立てを、ということが本共同研究の初志でしたので、拘りを説くことができませんでした。その意味で、武内先生にご指摘いただくことになったのは、やはり私のミスです。

5) どこかで説明があったのかもしれませんが、今回の発言が二人だけで、他の共同研究者の発言がなく、他の人は、どこを分担したのだらうかと思いました。望月先生の補足説明が少しあってもいいと思いました。

- ・実は望月先生は発言を求められたのですが、チャット機能が停止していたようです。
- ・また望月先生は、今回は体調へのご負担をさけることを理由に発表者になることをご辞退されましたが、ZOOM 研究会では、常にリードしていただきました。
- ・他の先生方とは、合同でのリアルな研究会や調査を行なうことはできませんでしたが、上述しましたように、かなり長時間の電話により、調査の実施と調査結果の分析についての検討を繰り返してきました。その成果が調査研究の記録の中に組み込まれています。
- ・なお、本テーマのもとで形成した研究グループは、子ども社会学会での発表とラウンドテーブル参加の研究グループのメンバーと重なります。
- ・その意味で、次年度に向けての実質的なスタートとして、近日中に ZOOM による反省と再起動の集いを実施する準備を始めています。

★武内先生からいただいた 5 種の問いと私なりの回答を踏まえて、教育社会学会での発表に使用したパワーポイントの内容に加筆修正を行って、UMAI Education Research Laboratories に掲載します。

★これまで作成してきた調査研究記録のメモも一緒に掲載します。

★作業が終わりましたらお知らせしますので、改めてご教示のほど、お願いいたします。